

サロンde人権記録

公開シンポジウム

～やおい／BL研究の今を熱く語る

シンポジスト：堀 あきこ・東 園子・守 如子

コメンテーター：秦 美香子・増田 聡

〈古久保〉

ただいまより、「サロンde人権 公開シンポジウム～やおい／BL研究の今を熱く語る」を開催したいと思います。本日のシンポジウムですが、主催が大阪市立大学人権問題研究センター、共催がNPO法人ウイメンズ・アクション・ネットワークならびに大阪腐女子研究会というかたちでの開催となっています。

私は本日司会をつとめます大阪市立大学人権問題研究センターの研究員の古久保と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめにこの企画について少々説明したいと思います。私ども、大阪市立大学人権問題研究センターは、元々は同和問題研究室を前身としておりまして、2000年に改組された全学組織です。人権問題研究センターでは年間8回ほど市民に公開された研究会「サロンde人権」という研究会を開催しています。ここ1年を振り返りましても、部落問題、ホーレス問題、ベシックインカムの問題、同一価値同一賃金の問題、それから在日外国人の参政権問題、あるいは障害者の教育権の問題について、様々な分野の研究者、あるいは社会活動家、あるいはNPOの実践家をお招きして、こじんまりとしながらも自由で闊達な研究交流、ならびに意見交換をしてまいりました。今回は、「サロンde人権」の特別

編としましてこういうふうな大きなシンポジウムを企画したのですが、もとはと言えばこの企画は、大阪腐女子研究会という学生主体の研究会に参加している大阪市立大学の学生、院生、卒業生の皆さんからの提案によって始まったものです。

自らを「腐女子」と名乗る学生と議論をする中で、私自身がやおい／BLというこの現象について、どういうふうにかえたらいいんだろうかと思うようになっていきました。

男性同士の愛憎の物語というものをマンガや小説という形態で女性たちが楽しむということ、この行為あるいは事象は、別にここ10年で初めて生じたということではなく、私自身を振り返っても30年以上前からマンガという形態で少年愛の物語を好んで読んできたように思います。しかしながら90年代以降、やおい／BLものと言われるジャンルの作品が非常にボリュームを拡大させていきます。そしてまた性的表現がより多く、よりリアルになっていくという状況を迎えているように思います。

現在では、大きな書店においては、やおい／BL系の大きなコーナーがあるというのも全く珍しくないのですが、と同時に、この事象については、様々な立場からの議論が起こってまいりました。例えば性的表現が非常に過激だとして、

規制すべきではないかという議論があることも確かです。あるいは大阪に引きつけて言えば、2008年の夏に、堺市の公立図書館でBL本を排斥しようという一部の市民の意見によって、開架図書からBL関係の本は外すという事態が起きました。この事態に対しては、フェミニズムに対するバックラッシュ勢力による攻撃だとして反対運動が起きました。あるいは、やおい／BL本を愛でるという行為そのものが、ゲイやホモセクシャルに対する差別になっているんじゃないかという議論のたて方があるのも事実です。また、腐女子という表現は非常によく使われるようになりましたが、腐女子に対してのネット上での批判やからかい、あるいは差別的な表現も多々見受けられる現状にあります。

私自身は大阪市立大学の中では、ジェンダー平等教育を担当しているのですが、その授業に対する感想文の中に腐女子に対する批判、反感というものが書かれるということも何度も経験してまいりました。こういう状況の中で、やおいやBLの作品たちが多く読まれているという実態・事実・事象に対して、ジェンダー平等社会をめざすという私の関心からして、どう考えていくのが一番フェアなんだろうか、そういう問題意識で考え込んでしまいました。

そもそもなんでこんなにも多くの女性たちが、やおい／BLを好むのだろうか、ここから改めて考えてみる必要があるのではないか。これが今回の企画の出発点でした。語られる対象になることの多かったやおい／BL好きな女性たちでしたが、女性たち自身にとって、やおいやBLはいったいどんな魅力を持っているのか、これを真っ向から議論していきたいと思います。本日は、やおい／BLについて、その魅力というものの多角的検討から始めて、やおいやBLについて様々

な議論ができていければいいなと思っています。

このシンポジウムには、この問題を熱く語る新進気鋭の研究者三人をお招きしています。堀あきこさん、東園子さん、守如子さん、このお三方をシンポジストにお迎えして、コメンテーターとして秦美香子さんと増田聡さんをお願いしています。みなさんと、ゆっくりとじっくりと考えていければいいなと思っています。

それでは次に、石川優さんから用語説明をしていただき、そしてシンポジストのメイン報告をお三方にお願いしたいと思います。

〈石川〉

こんにちは。大阪市立大学大学院生の石川と申します。この発表では、そもそもやおい／BLはどのようなものなのか、という点について簡単に説明させていただきます。やおい／BLについてよく知らない方はこの発表の情報を参考にいただき、やおい／BLに詳しいという方は、復習がてら聞いていただければと思います。要するに、私たちがこのシンポジウムで「やおい／BL」と呼んでいるジャンルの基礎的な知識を、ここで皆さんと共有しておきたいということです。とはいっても15分という短い時間ですので、限定的または単純化して説明せざるを得ない部分があるということは、あらかじめお断りしておきます。

さっそく本題に入りたいと思います。このシンポジウムでは、やおい／BLを「日本における、女性作者による女性読者を中心とした、男性同士の恋愛あるいは性愛を描いた作品群の総称」という、女性向けの創作ジャンルの一つを指す言葉として使っています。これは厳密な定義というより、議論の見通しをよくするための緩やかな「暫定的な取り決め」(斎藤環『戦闘美少女

の精神分析』筑摩書房、2006)とと考えていただければと思います。とはいえ、この説明だけだとやや漠然としていますので、「時間」という補助線を引きたいと思います。というのは、どの時代に焦点を当てるかによって、やおい／BLの風景はずいぶん変わってくるからです。このシンポジウムでは、おおよそ90年代以降の、先ほど申し上げた傾向をもつ同人誌、または商業誌の作品群をやおい／BLとして想定しています。

女性向けの男性同士の愛の物語を指す言葉としては、やおい／BLのほかにも、少年愛やJune、耽美など様々な呼び方があります。この点について、ジャンルの形成史という観点から簡単に整理しておきたいと思います。ここで押さえておきたいのは次の二点です。第一に、女性向けの男性同士の愛の物語が、70年代後半から徐々に女性たちの間で形成されてきたということ、第二に、それがやおいやBLといった様々なサブカテゴリを派生させながら、現在までに巨大な表現空間を形成しているということです。このような流れを時系列順に並べると、大まかに言って三つの段階を見て取ることができると思います。まず、第一段階として、やおい／BLの源流のひとつとして、70年代後半の「花の24年組」と呼ばれる、少女マンガ家たちによる少年愛マンガの一群が挙げられると思います。次に、70年代末から80年代にかけて、後続の世代によってやおいという呼称が生み出されて定着し、それとほぼ同時期に、Juneという専門商業誌が人気を得ます。最後に、90年代に入ると、新たにボーイズラブ (BL) と呼ばれる商業ジャンルが登場して、現在に至ります。

このようなサブカテゴリが派生していく過程にはさまざまな影響関係がありますが、さしあたり今日のシンポジウムで注目したいのはやお

いとBLです。まず、やおいとBLに共通する、物語を読む上での基本コードについてご説明したいと思います。最も重要なコードはカップリングです。カップリングとは、男性キャラクター同士の恋愛関係を示唆する組み合わせを意味しています。野火ノビタさんは、カップリングを「つがい」とした上で「二人は愛し合っているのよ!」という妄想が「やおい」の重大なテーゼなのである」と述べています(野火ノビタ『大人は判ってくれない：野火ノビタ批評集成』日本評論社、2003)。このような「妄想」はカップリングとしてコード化され、やおい／BLの重要な物語装置として機能しています。さらに、カップリングは単なる組み合わせを意味するだけでなく、攻めと受けという形で役割が固定されます。攻めはカップリングの中で能動的な役割を担う人、受けは受動的な役割を担う人、というふうに説明できます。このようなコードを軸にして、さまざまな関係性の「型」を作り出すことが可能になります。例えば、「ヘタレ攻め×俺様受け」といった性格類型に基づくカップリングや、「年下攻め」、「主従」といった年齢や職業などの諸条件に基づくもの、あるいはカップリングという約束事を前提とした上で、あえてそれを逸脱するような方法もあるかと思います。このように、やおい／BLにはカップリングという特有の約束事が強く働いています。

では、やおいとBLについて個別に概観したいと思います。まず、やおいから見ていきます。やおいの定義はさまざまですが、このシンポジウムでは、ひとまず「既存の作品の男性間の関係性に恋愛要素を読み込み、それをもとにした二次的な作品群」という意味に限定したいと思います。このようなやおいは、二次創作の一種として位置づけることができます。二次創作と

は、簡単に言うと、原作のキャラクターや世界観などの諸設定を流用して行われる、ファンによる表現活動や表現物です。一般的に、二次創作は男性向けと女性向けに大別することができ、女性向け二次創作の主流がやおいである、と言えます。現在、やおいの原作として人気があるのは、『週刊少年ジャンプ』などの少年向けのコンテンツが多いようです。やおいの語源は「やまなし、おちなし、意味なし」の頭文字をとったものとされ、1970年代末の女性による同人誌がその発祥といわれています。

次に、やおいの現状について、同人誌を事例に見ていきたいと思えます。やおい同人誌を制作する人の一般的な行動パターンは、お気に入りのカップリングの同人誌を同人誌即売会で頒布して、そこで「同志」と交流する、というものではないかと思えます。同人誌の描き手にはプロの作家もいますが、おそらく趣味で活動しているアマチュアの方が多いでしょう。では、やおいはどの程度の規模で展開されているのかということ、日本最大の同人誌即売会である「コミックマーケット」を例に確認しておきたいと思えます。時間も限られていますので、二点だけ申し上げます。まず一点目は、コミックマーケット自体はさまざまな表現を受け入れる場ですが、参加サークル全体の中で二次創作が大きな比重を占めている、ということです。そして二点目は、その参加サークル全体の中で女性の占める割合が比較的高い、ということです。2004年に行われた調査によると、全サークル参加者のうち、約7割が女性であることがわかっています(杉山あかし、コミック文化研究会「コミックマーケット30周年記念調査報告」コミックマーケット準備会編『コミックマーケット74カタログ』(有)コミケット、2008)。また、女

性向け二次創作全体の中で、やおいサークル数が非常に多いことから、やおい同人誌が大きな規模で展開されていると推測できます。

次に、BLについて確認しておきたいと思えます。このシンポジウムでは、やおいのように下敷きとなる原作を持たない、所謂「オリジナル」の(主に商業的な)作品群を「BL」と呼んでいます。ボーイズラブという呼び方は90年代初頭に登場して、徐々に定着したと考えられています。BLはマンガと小説を中心に、ゲームやドラマCDなど、さまざまな媒体で商業展開されています。BLという呼称から、青少年の恋愛物語が中心と思われるかもしれませんが、現在では成人男性が主人公のものもあり、男性同士の多様な関係性が描かれています。次に、BLの商業出版規模について概観しておきます。BLの商業出版全体は、定期刊行される雑誌、特定のテーマに沿った読切を掲載するアンソロジー、単行本や文庫本などで構成されています。本日の登壇者である堀あきこさんの調査によりますと、2009年時点ではBLマンガ雑誌は約12～13誌、アンソロジー誌は約5～6誌、発行されているそうです(堀あきこ『欲望のコード：マンガにみるセクシュアリティの男女差』臨川書店、2009)。公称部数は10～15万部のものが多く、平均価格帯は650円程度であるとのこと。では、それを読むBLの愛好者の人口はどの程度なのかといえますと、2003年の時点で、溝口彰子さんは約100万人ではないかと推測されています(溝口彰子「それは、誰の、どんな、「リアル」?: ヤオイの言説空間を整理するこころみ」イメージ&ジェンダー研究会編『イメージ&ジェンダー』Vol.4、彩樹社、2003)。一方、堀さんは、やおい愛好者層との重複やインターネットだけで楽しむ読者などを視野に入れると、やおい/BLとい

うジャンル全体の愛好者はその数倍ではないかと推測されています。

以上、駆け足ではありますが、やおいとBLについて概観しました。やおい／BLは現在極めて大きな規模で展開されており、それを支える愛好者の層はとても厚い、ということが言えると思います。やおい／BLは日本で生まれた女性向けの創作ジャンルではありますが、男性の愛好者もいますし、現在では海外でも高い人気を集めています。女性を主な担い手とした男同士の愛の物語が多様な形で受容されている、と言うことができるでしょう。ご清聴ありがとうございました。

〈古久保〉

石川さん、ありがとうございました。

それでは、シンポジストに登場いただきます。ここで皆様にご理解いただきたいのですが、シンポジウムの内容上、性的な表現を伴う画像が出てきます。例えば、いわゆる18禁の雑誌の一部をスライドとして映しながらご説明するということがありますが、ご理解いただきたいと思えます。なお、表示する際には必ず、「これから性的な描写を表示する」とシンポジストもご指摘くださると思いますので、お嫌な方は、目を伏せるであるとか自己防衛をしていただけたらと思います。それではまず堀あきこさん、よろしくお願ひします。

〈堀〉

こんにちは、堀あきこです。よろしくお願ひします。今日は、やおい／BLの魅力ということで、私はBLについてお話ししたいと思います。最初にお断りしておきたいのですが、私はBLの魅力について考えるにあたって、他のジャンル、

いわゆるエロマンガ・男性向けマンガとの比較という方法をとっています。なぜそういうことをするのかという理由について少し触れたいのですが、今、BLが有害図書規制にあたり、堺市の図書館の件もありますように、性的なものとして社会的に見られているという事実があります。もちろん、BLの中にはエッチシーンがないものもありますし、愛好家の方の中には、性的なものとして見られること自体に嫌悪感をもつ方もいらっしゃると思います。ただ、私の考え方としては、すでにやおい／BLが性的なものとして見られている現実があるわけですから、いったんそれを引き受けたうえで、いわゆるポルノ、男性向け性表現とは異なる仕組みや魅力がBLにあるということを考えていると思っています。

今日の構成ですが、1. BLのお約束、典型的パターンから見る欲望、ということで、BLの何を考えるのかということをお話します。次に、2. 視線ということで、読者は作品をどう見ているのかということを考えています。そこから、3. 対の関係・攻め受け・類型ということで、BLの基本的構造について考え、最後にBLの最大ポイントであり魅力ではないかと思っている“関係性”についてお話ししたいと思います。

BLと言っても、今日取り上げるのはマンガだけで、アニメや小説などには触れません。扱うBLも極々一部です。BLとはこういうものかということを示すのではなくて、こんなことが考えられるのではないかと、可能性だと付け加えさせていただきます。

さて、BLのお約束、典型的パターンから見る欲望ということですが、マンガというのは書く人はもちろん、読む人にもリテラシーが必要です。例えば、アメコミ、アメリカンコミックスは、

左開きで左ページから右ページにめくっていきます。これは、『GIRL』という日系カナダ人女性が書いたアメコミの日本語版なのですが、コマが左から右に進んでいます。日本のマンガと逆です。こうしたマンガを読むための基礎知識は、普段意識せずにはいますが、それを知らないと、この場合時系列がおかしくなってしまう。

やおい／BLを描き・読むときにも、このようになりテラシーが必要とされます。それは、さっき石川さんから説明があった、攻め・受けという概念や、BLは恋愛物が中心だというような、やおい／BL愛好家には共有されていて、特に気にすることなく当然のことと思われるものです。そのほか、お約束や典型的パターン……王道とかテンプレとも言いますが、私はそういうものがやおいの魅力を考える上で重要なのではないかと考えています。

では、いろいろな雑誌の表紙を取り上げてみたいと思います。表紙は、雑誌の顔に当たる部分で、表紙を見てその雑誌を手にとったり、逆に手に取らなかつたりということが起こる重要なものです。表紙にはその雑誌の特徴やアピールしたいことが表現されていると言えるでしょう。18禁の雑誌の表紙をあげます。こちらは、『COMIC MEGA STORE』という雑誌で、これが、男性向けエロマンガ表紙の典型的パターンと言えると思います。まず、モデルは女性一人です。かなり露出度の高い服装で、この場合はお尻がすごく強調されている。また、モデルの女性が読者の方を見つめる、いわば読者とモデルが見つめあう構造になっています。そのほか、同じ時期に発売された2010年9月号をざっと羅列してみました。他の雑誌を見てもほとんどこの典型的パターンです。以前、2007年7月号の男性向け雑誌44誌を調べたことがあるのですが、

おおむね、同じような構図でした。あと、成年向けの場合、表紙に男性がまったく登場しないということが言えます。

BLは、これは『ピアス』ですが、こちらが典型的パターンだと思います。特徴としては、モデルは男性が二人、肌の露出度は低め、特にお尻を大きく描くというような身体パーツの強調はないです。さっき男性向けではモデルが読者を見つめるカメラ目線が共通していると言ったのですが、BLの場合、受けが読者の方を見て、攻めは受けを見ているという視線がプラスされています。同じ時期の雑誌をあげてみたのですが、ほとんど同じパターンです。それから、男性向けのエロマンガの表紙に男性モデルは登場しないと言いました。BLにもご覧のとおり女性は登場しません。BLは男性同士の恋愛物語なので、女性が表紙に登場しないのも当たり前かなと思うのですが、エロマンガは考えてみたら男女の物語なんですね。男女の物語であるのに、表紙には女性しか描かれていないことが特徴的だと言えます。

男性向けエロマンガと同じく男女の物語であり、なおかつ性的であるとみなされているものに、TL、ティーンズラブというジャンルがあります。TLというのは、少女マンガの恋愛にキス以上のシーンが入った作品といえます。TL雑誌の表紙はほとんど男女の組み合わせ、モデルが二人になっています。BLとTLで共通しているのは男性同士、あるいは男女のカップルがモデルであるということ。性的とされているジャンルではあるけれども、男性向けのように露出度が高くなく、身体パーツの強調もないということ。カメラ目線のほかに、カップルの一人がもう一人を見つめるような視線があつて、読者の視線とずれているということが言えます。

これらをまとめますと、男性向けでは、モデル身体の強調が行われ、胸とか足とかお尻とか、そういう身体パーツに読者の視線が向かう構造になっていて、それは視覚的なジェンダー表象に向かうフェティッシュな欲望と呼べるかと思えます。一方BLの場合は、そういうフェティッシュな欲望は少なくとも雑誌表紙からは見られません。BLと同じく、恋愛と性を地続きのものとして描くTLの場合も同じでした。ここから、BLやTLは男性向けの性的な雑誌とはウリが違うと考えられます。この違いは、セックスシーンでさらにはっきりします。

次に18禁をお見せします。男性向けのセックスシーンで頻繁に用いられるマンガのテクニクとして、男性キャラの透明化、後景化というものがあります。この場合、コマの中心に女性を大きく描いて、胸より下しか男性は描かれていません。女性キャラを大きく描いて男性キャラを目立たなくさせる。あまり画面に男性を登場させません。なぜこういった手法が用いられるかということ、女性キャラの身体や快感、女性の性的快楽の様子を表現の中心にして、男性キャラを不可視にすることで、読者が作品の男性キャラと同一化しやすくなるためだと言われています。このコマは、膣にペニスが入っていることを示す、断面図と呼ばれるテクニクですが、読者に性行為をよりリアルな感覚として届けようとする意図だと言われています。こちらは男性を透明に描く手法です。読者には本当は男性キャラの体で女性キャラが見えないはずですが、透明化された男性キャラを通して女性キャラを見ることができる、という仕組みになっています。また、男性キャラそのものは重視されず、性器の方がクローズアップされているという感じがあると思います。男性キャラの描写に比べ、

女性キャラの表情や身体は、かなり細かく描かれています。こうした技法が女性キャラの性的身体、快楽を表現すると共に、男性読者がまるで女性キャラと性行為を行っているかのような、そういう演出するものだとも考えられるのではないのでしょうか。

BLのセックスシーンはどうかというと、受けだけでなく攻めもしっかり描かれているということが言えます。守如子さんも論じておられますが、BLは特に攻めの顔や表情がしっかり描かれている点で男性向けと大きく違っています。セックスシーンに内面のモノローグ——台詞になっていない心情の描写——主人公の心理描写がかなり用いられるということも特徴的です。この作品の場合は、内面のモノローグに、受けの心情が切々と書かれています。BLでは、読者は受けと攻めの両方の身体を見て、また、台詞になっていない心情を通して物語を深く知る仕組みがセックスシーンに持ち込まれているのです。この作品では、受けと攻めが一コマずつ交互に描かれ、まったく台詞がなく、攻めの内面のモノローグだけでセックスシーンが進んでいきます。これらから言えるのは、男性向けと比べて、BLのセックスシーンでは攻め、受けどちらかの性的身体を強調するのではなく、二人の行為を第三者的な視点で見るといった構造があるということです。強調しておきたいのは、男性向けで見たような、受けの性的快楽を強調するタイプのBLも存在しますし、そうした手法が用いられないわけではないということです。ただ、BLのセックスシーンは男性向けと比較すると、攻め、受けの描写が同じような割合であったり、内面のモノローグが用いられるのが特徴的だということです。

これまでお話してきたことを図式化してみま

した。まず、男性向けで行われていた男性キャラの透明化や断面図テクニックというのは、読者が男性キャラに同一化して女性キャラと一対一になるという構造ではないかと考えられます。これは最初に見てもらった雑誌の表紙も同じで、女性モデルが男性読者を見つめるという一対一の構造になっていたことを思い出していただければいいかと思います。次にBLの読者の視線はどうなっているのかと言いますと、これまでの研究で中島梓さんなどがおっしゃっていたのは、読者が受けに同一化していて、なおかつ視線が受けに向かうのだ、受けとなって攻めに愛される物語がBL／やおいなのだというお話でした。次に、中野冬美さんや野火ノビタさんがおっしゃっていたのが、いや、攻めになって受けをかわいがりたいのだ、と、だから、攻めキャラに同一化して受けを見つめるのだ、と。これは男性向けとよく似た構造になると思います。もう一つ、足したいのが、攻めと受けが同じような割合で描かれていること、内面のモノローグでセックスシーンと物語が共にあるということから、二人を俯瞰する視線で見るというものです。受けか攻め、どちらかに同一化するというよりも、二人ともを、どちらも見るということです。まとめますと、男性向けでは読者の視線が女性キャラへ誘導されることが多く、それと比較するとBLは受けにも攻めにも同一化できるとともに、どちらも見つめることができる。また、単体でなく二人を見つめることも可能で、男性向けに比べ対象が固定していない、マルチな視線であると言えます。

BLは攻め受けどちらも見る、二人ともを見つめるという仕組みになっていることをお話してきました。二人、カップルという対の関係はBLの基本的構造だと言えます。このことから、BL

は男性キャラ個人の存在や魅力だけでなく“対の関係”という、男性集団としてキャラクターを見ているといえると思います。男性向けは、単体の女性キャラだけを見る仕組みがあったんですが、BLは集団の状態を欲望しているのではないかということです。

対の関係と同じく重要概念として、攻め、受けという役割があります。このトピックは、二次のやおいの方がわかりやすいので、少しBLから離れて例に挙げたいと思います。二次のやおいは、オリジナル作品から攻めと受けを選んでカップリングし、対の関係にします。ここで注目したいのが逆カップリングです。A×Bというカップリングが好きな人にとって、B×Aは受け入れられないということです。AとB、同じキャラクターの組み合わせなのに、攻め、受けの役割が入れ替わると受け入れられない。この理由は、やおいが恋愛という人間同士の親密な関係をテーマにしているために、攻めAと受けBで作られる物語と、攻めB、受けAで作られる物語が別の物語になるからだと考えられます。野火ノビタさんは、「女性はかたくなで限定的なのだ。たとえ同じ原作が好きであっても、好みの『カップリング』が違えば全く住む世界が違ってしまおう」と論じています。カップリングは、ただ単に男性二人を対にすることではなく、二人に、攻め、受けを割り当て、その関係性、物語を作ることだからこそ、逆カブは不可ということになるのではないかと思います。

関係性と関連してもう一点、重要な概念として、「ヘタレ攻め」とか「俺様受け」とか「鬼畜攻め」と呼ばれるような類型をあげたいと思います。この類型はすべて攻め受けの“対の関係”の中で、相対的なものとして存在しています。例えばキャラ一人が鬼畜な性格であっても、「鬼

畜攻め」というポジションにつくためには、「鬼畜攻め」を許容する受けがないと「鬼畜攻め」にはなれないわけですね。相対的というのはそういう意味です。男性向けですと、読者の好みのパターンや作品傾向は、人妻とか猫耳とか巨乳とか、そうした女性キャラの属性が大きく影響するのですが、BLの場合は関係性そのものが好みのパターンになると考えられます。「下克上」や「年下攻め」というのもあって、これは一見年下なのに攻めるなんてとか、弱いものが攻めとは、という、そういう因習的な規範をBL愛好家が内面化しているあらわれとも見えるのですが、男性同士という対等な関係があるからこそ、男女物では描くことが難しい、固定的な権力構造のずらしが可能になっているのではないかと。因習的な規範そのものはとりあえず不問にし、逆照射することで権力構造をパロディ化しているといえるんじゃないかなと思っています。

さて、なぜ、やおい／BLは恋愛をテーマに選んだのか。これまで多く論じられてきたのは、やおい／BL愛好家がロマンティックラブイデオロギーを内面化しているからだ、というものでした。私はそういうイデオロギーではなく、親密な関係を最もわかりやすいもの、最も濃い濃厚なものとして描くために恋愛が選ばれたとも考えられるのではないかと、と思っています。濃厚な二者関係を描くために、やおい／BLは恋愛を利用しているのではないかと。関係性を重視し、性的とされる表現においても、人と人とのつながりを描こうとするやおい／BLは、フェティッシュな欲望がベースになっている男性向けと大きな違いがあると考えます。それは、良い・悪いという価値の話ではなく、ただ違う価値観に拠っているということです。斎藤環さんは、このジェンダーによる差異を、所有と関係

の違いとして、『関係する女、所有する男』という本で論じられています。男性にとって関係性の重要性が低いことを、斎藤さんは男性向けの1ジャンルとも言える「触手もの」を例にあげて、触手と女性キャラの間にはいかなる関係もない、とおっしゃっています。ただ、やおいでは、関係性があれば無機物同士でもカップリングできるわけで、それを考えると、男性向けのコードとは大きな違いがあるのではないかと思います。

ここまで、男性向けとBLを比較すると、男性向けの文法では解釈し得ない部分がBLにある、ということをお話してきました。ただ、注意していただきたいのは、女性が本質的に関係性を欲望し、男性が本質的にフェティッシュな欲望を持つということではないという点です。この男女の差異は、社会的規範とかしつけとか、女はこうあるべきといった性規範から私たちが影響を受けるために、女性的な欲望・男性的な欲望といったジェンダーによる違いが出てくる、ということです。現在、性的なものとして、ある種のマンガがさまざまな批判を受けています。その批判の軸として、男性的な欲望、フェティッシュな欲望が想定されていると言えらると思います。しかし、女性的な関係性への欲望というのは、男性向けを基準に判断できないのではないかと。BLは恋愛という濃厚な関係性を描き、恋愛と性が地続きにあるというものだからこそ、性表現を描いているんじゃないかと私は思います。そのこと自体が有害だというふうにはどうも言えない。BLは今、性的な部分ばかりが取り上げられる傾向にあります、その作品が何を描いているのかという視点が必要なのではないかと私は考えています。そして、それは男性向け作品を考えるうえでも必要な視点だと思っています。ありがとうございました。

〈参考文献〉

- Jillian Tamaki・Marilo Tamaki, 2009, 『GIRL』サンクチュアリ出版。
 斎藤環, 2009, 『関係する女 所有する男』講談社。
 中島梓, 1998, 『美少年学入門 増補新版』筑摩書房。など
 中野冬美, 1994, 「やおい表現と差別—女のためのポルノグラフィ—をときほぐす」『女性ライフサイクル研究』4: 130-138。
 野火ノビタ, 2003, 「大人は判ってくれない—野火ノビタ批評集成」日本評論社。
 守如子, 2007, 「ハードなBL—その可能性」『ユリイカ』39(7): 77-83。

〈古久保〉

ありがとうございました。男性の読むエロマンガとの比較の中で、BLが何を欲望し、描こうとするのが非常にクリアにわかるご発表でした。続きまして、「やおいはなぜ恋愛を描くのか」というタイトルで、東園子さんの方からお話したいと思っています。よろしく願います。

〈東〉

ただいまご紹介いただきました大阪大学の東園子です。専門は社会学になります。私のやおいとの出会いは小学校6年生ぐらいの時でした。やおいにはまった友達から見せてもらったのが最初です。その後もずっと周囲にやおい・BL好きの友達がいたんですが、私自身はその魅力がよくわかりませんでした。「何がおもしろいのかな」という疑問が高じて大学の卒業論文のテーマにまでしたんですけど、研究しているうちに自分でも楽しみ方がわかってきて、ミイラ取りがミイラになった状態です。

この報告は、やおい・BLの中でも既存のアニメやマンガなどを素材にして作られた二次創作

のやおいについてお話しさせていただきます。そのため、今からお話しする内容がオリジナルのBLにも当てはまるかどうかは、私自身がぜひ皆さんのご意見を聞かせていただきたいところです。また、この報告はやおいのすべての側面を説明するものでも、あらゆる腐女子にあてはまるものでもないことはご承知おきください。

「やおいはなぜ恋愛を描くのか」という報告タイトルをご覧になって、「そもそもやおいは恋愛を描くためのものなのだから、そんなの当たり前じゃないか」と思われた方もいるのではないのでしょうか。ですが、この報告ではその前提を問い直し、やおいで恋愛が描かれる理由について改めて考えてみたいと思います。そのために、やおいにおいて恋愛という要素がどういう機能を持っているのかを分析します。その際、やおいを好きな女性たち——ここでは「やおい系腐女子」と呼びます——がやおいを楽しむ際の文脈を考慮しながら考察していきます。

このやおい系腐女子たちは、二次創作がオタク文化の一つということもあって、自らのことをオタクと思っている人が多いです。女性のオタクの中にはやおいが嫌いという人もいますが、石川さんの最初の説明でもあったように、女性のオタクの多くを占めるのはやおい系の腐女子だと考えられます。オタクというと一般的にはどうしても男性の印象が強いですし、男性のオタクの世界については、例えば映画やドラマになった『電車男』などでそれなりにイメージがある人も多いと思います。それに対して、女性のオタクの世界はどんな感じなのか想像がつかない人もいらっしゃるでしょう。そのイメージをつかんでもらうきっかけになるかもしれないと思って、今日は私がこの夏に某同人誌即売会に行ったときに着たワンピースを着てきました。

この服は私のお気に入りのものなのですが、なぜこれを着て同人誌即売会——女性のオタクの間では単に「イベント」と言われます——に行ったかという、私が初めて同人誌即売会に行く時に、つれていってくれたオタクの友達から「オタクにとってイベントはパーティーみたいなものだから、ちゃんとおしゃれして来い」と言われて、その言いつけを今でも守っているからです。すべての人がそうだというわけではありませんが、女性のオタクの中には、同人誌即売会にあわせて美容院に行ったり新しい服を買ったりと、おしゃれをしてイベントに行く人がそれなりにいます。なぜかと言うと、同人誌即売会はオタクにとってのお祭りなのでハレの日にあわせて一張羅を着ていこうという気分になりますし、普段はなかなか会えないオタク仲間に出会うことも多いので同窓会におしゃれをしていくのと似た心境にもなります。まさに同人誌即売会はパーティー、つまり社交の場になっているんですね。同人誌即売会は同人誌を売ったり買ったりするための場所ですが、そこにおしゃれをしていこうというのは社交という側面を意識した行動ではないかと考えられます。今ではインターネットの普及などによって同人誌即売会に行かずにやおいを楽しむ腐女子もたくさんいますが、社交という側面はやおいについて考える際に重要な点だと私は考えています。

では、ここから具体的にやおいの話に入ります。やおい系腐女子たちは、アニメ、マンガ、小説、テレビドラマ、映画、あるいは男性アイドルなどの対象からどのようにやおいという物語を作っていくのかを見ていきたいと思います。二次創作のやおいは、元になる原作で描かれる男性キャラクターの間にある関係性を見極めて、その男同士の人間関係を恋愛なものに読み替

えて作られます。例えば、あるアニメの中で男性AとBが仲間同士で、CはBをライバル視していて、CとAはすごく仲が悪いという関係が描かれていたとします。やおい系腐女子たちはこれを、AとBはプライベートでも恋人としてつきあっていて、CがBに何かと絡んでくるのは本当はBのことが好きだからで、CとAの仲が悪いのはお互いにBを巡って嫉妬しあっているからだ、などと想像して、それをマンガや小説に仕立て上げます。このように、やおい系腐女子たちは、ある作品の中からそこで描かれる男同士の人間関係に関心の焦点を当てています。物語のキャラクター同士の人間関係を図にしたものを人物相関図と言いますが、それを中心に作品を楽しんでいるんですね。私はこのような作品消費の仕方を、人物相関図から「相関図消費」と呼んでいます。

この関係性の読み替えが具体的にどのように行われるのかの例として、近年やおい化の対象として人気がある作品の一つである『家庭教師ヒットマンREBORN!』という少年マンガを取り上げます。この作品には雲雀恭弥というキャラクターが登場するんですが、彼のことをディーノというキャラクターだけが「恭弥」と下の名前で呼んでいます。やおい系の腐女子たちは、ここからディーノと雲雀はつきあっているんじゃないかと考えるわけです。彼女たちが行っているのは、物語の中から名前呼び方などキャラクター同士の間柄を示すような手がかりを探して、それを基に二人の関係性を解釈していく遊び、解釈のゲームを行っていると言えます。そして、こういった作品に対する解釈をマンガや小説に表したのがやおいです。つまり、やおいを読むことは、そのマンガや小説を作った人が原作に対して行った解釈を聞くこ

ともあります。その解釈の中には自分と同じようなものもあれば、自分では思いもしなかったような斬新なものもあるでしょう。やおいの楽しみの一つは、自分の好きなキャラクター同士の関係性をあれこれ解釈してみたり、他の人の解釈を見比べたりすることにあります。

このように、やおい系腐女子たちは物語で描かれる男同士の関係の解釈性をお互いに披露しあって楽しんでいるのですが、その解釈は全く自由になされているのではなく、男同士の絆を恋愛的なものともみならずという一定の型に沿って行われています。つまり、やおいの恋愛という要素は、解釈ゲームにおける解釈の仕方を定めたルールとして存在しています。この解釈ゲームで自分の解釈の妥当性を示す根拠となるのが、世の中で共有されている恋愛に対する観念です。たとえば、先ほどあげた「REBORN！」の例だと、普通恋人のことは名字ではなく下の名前の方で呼ぶものだという考え方が一般的にあるからこそ、ディーノが雲雀を「恭弥」と呼ぶことが二人が恋人同士であることを示す証拠として通用します。これに限らず、世の中には「恋愛感情ってこういうもの」「相手のことが好きだったらこうするはず」といった恋愛に対する観念が多数存在します。ニクラス・ルーマンという社会学者は、このような社会で共有されている恋愛に対する観念を「愛のコード」と呼んでいます。そう言うと難しく聞こえるかもしれませんが、この報告では、皆が知っているような恋愛に関する「お約束」のパターンとさせていただいたら結構です。やおいはこの愛のコードに基づいて男同士の関係を解釈します。

ここまでお話ししてきたことをまとめてみますと、「やおい=愛のコード×人物相関図」という式で表すことができます。私としてはこの順

番にこだわりがあって、というのも、やおいの世界では「×」はカップリングを表す記号で、その左側に名前が書かれている方が攻めなんです。つまり、私は「愛のコード=攻め/人物相関図=受け」と解釈しているわけです。やおいとはある物語から登場人物二人を選び出して、二人の関係を「攻め×受け」という形で解釈するものとも言えますが、この式はやおいという現象の中から愛のコードと人物相関図という要素を二つ取りだして、「攻め×受け」という形で私の解釈を表しているのです。ある意味、やおいについてのやおい、メタやおいと言えなくもないかなと思います。

次に、なぜやおいでは男同士の関係性を恋愛的に解釈するのか、男同士の絆の解釈に愛のコードを使うとどのような利点があるのかについて考えてみたいと思います。そのために、まず、私がインタビューをさせてもらった腐女子のAさんの発言を取り上げます。私がAさんに「やおいとかBLでなくて、単なる男同士の友情物語ではダメなんですか?」と聞いたとき、Aさんは「あかんっていうか、自然と湧き出てしまう、みたいな。ほら、仲いい男女がどんだけ『ちゃうねん、うちら親友やねん』って言っても、みんな疑うやん? そんなノリで」と答えてくれました。Aさんが言っているように、とても仲がいい男性と女性に対して、周囲の人が「あの二人、本当はつきあってるんじゃないの?」と疑いを持つのはよくあることだと思います。そのように見なすのは、「非常に仲のいい男女だったらお互いに恋愛感情を抱いてつきあってはるはずだ」という考えがあるからです。つまり、世の中には「非常に親密な間柄=恋愛関係」という愛のコードが存在しており、それに則って仲のいい男女の間柄が解釈されます。Aさんはそれと同じように、

仲のいい男性キャラクター二人を見たら、その二人を恋人同士として解釈するわけです。このように、「親密な間柄＝恋愛関係」という愛のコードの影響下では、仲の良い二人は恋人同士にした方がむしろ自然に見えることになります。

愛のコードは人間関係の解釈に用いられるばかりでなく、人間関係を表現するときにも使われます。例えば、スポーツ新聞では、ある野球の投手とバッテリーを組んでいる相性のいいキャッチャーのことを「誰々の恋女房」と書いたり、プロ野球チームがある選手の獲得を希望していると「タイガース、意中の恋人は〇〇選手、連日熱烈ラブコール」といった感じで恋愛表現をすることがあります。これは記者の人が本当に投手とキャッチャーの間に恋愛関係があるなどと思っているわけではなくて、パートナーシップや他者への強い関心等を表す記号、メタファーとして恋愛を利用しているわけです。それと同じように、堀さんもお話されていましたが、やおいにおいても二人の男性キャラクターの関係がとりわけ深いものであることを示す手段として恋愛を用いている面があるのではないのでしょうか。

やおいにおける性行為も、一面ではこれと同じ意味を持っていると考えられます。私がインタビューしたある腐女子の人に「やおい・BLにセックスシーンは必要ですか？」と尋ねたところ、「別になくてもいいけど、あったら、『ああ、やっと結ばれたのね、おめでとう』みたいな感じがするかな」と答えてくれました。彼女の中では、セックスシーンは男性二人の想いが通じ合って結ばれたことを表す記号になっていることがうかがえます。このようにやおいにおける性行為には、「二人はセックスするぐらいに深く愛し合っているんですよ、それぐらいの関係な

んですよ」と示す機能もあります。

また、やおいで恋愛が男同士の絆の解釈に用いられる理由は他にも考えられます。再び前に言った「REBORN!」の例を取り上げます。ディーノだけが雲雀を下の名前で呼ぶ理由としては、二人がつきあっているからという解釈の他にも色々な解釈が成り立ちます。例えば、変な例ですが、仮に着物が似合いそうな人を見ると、なぜかその人のことを下の名前で呼びたくってしまう人がいたとします。その人が友達から「なんでディーノだけが雲雀を『恭弥』って呼んでるんだと思う？」と聞かれて、「ディーノはきっと、雲雀のことを着物が似合うと思ってるんだよ」と言ったら絶対理解されなんでしょう。なぜなら、「相手を名前で呼ぶ＝着物が似合いそうと思っている」という考え方は一般的ではないからです。でも、「相手を名前で呼ぶ＝恋人同士」という考え方は広く共有されているために、「ディーノが雲雀を名前で呼ぶのは、二人がつきあっているからじゃないかな」と言うと、「ああ、そうかも」と相手に納得してもらいやすくなります。つまり、お互いが愛のコードを知っている状況では、物語の解釈に愛のコードを使うと、自分の解釈を相手にも共有してもらいやすくなります。

ルーマンによると、人は恋愛物語を読むことで、「あ、恋愛ってこういうものなんだ」と愛のコードを学んでいきます。そのために、恋愛物語に接することが多ければ多いほど愛のコードに精通するようになると考えられます。そして、現代社会では恋愛物語に触れる機会が男性よりも女性の方がはるかに多いのではないのでしょうか。たとえば、少女マンガや『セーラームーン』のような女の子向けのアニメなど、女性向けとされる物語には必ずと言っていいほど恋愛が描

かれています。現在のメディア状況では、女性であれば多かれ少なかれ恋愛物語に慣れ親しみ、愛のコードに通じていると想定することができます。そのため、女性の間で男同士の関係を解釈するとき、愛のコードを使って「ほら、この二人って少女マンガによく出てくるあのパターンじゃない？」と言うと、「わかるわかる、私もそう思う」と共感してもらえる可能性が高まります。

しかも、少年マンガなどで描かれる男同士の絆を愛のコードを使って恋愛的に解釈することは、男性から嫌がられることが多いんですね。やおいを好む男性も存在しますが、同人誌即売会を観察する限りでは少数派です。したがって、ある作品の中の男同士の絆を恋愛的に解釈すると、結果的にその作品の話をするコミュニケーションの相手が女性中心になる。愛のコードはコミュニケーションの輪から男性を排除する働きを持っているのではないかと考えられます。

このように、やおいにおける恋愛という要素は、愛のコードを共有している女性の間で互いの解釈を理解したり共有したりしやすくして、コミュニケーションを効率化するツールとして機能していると考えられます。ここでのコミュニケーションには双方向のやりとりだけでなく、マンガを読むといった一方的な情報伝達も含まれます。今、私と皆さんが日本語という言語を共有することで、コミュニケーション、すなわち情報伝達が可能になっているように、やおい系の腐女子たちは、ある作品から取り出した人物相関図と愛のコードという共通言語を使ってコミュニケーションを楽しんでいると見ることができます。

それでは、これまでの話をジェンダー論の観点から簡単にまとめてみたいと思います。先ほ

ど、少女マンガなどの女性向けのメディアには恋愛という要素があふれているという話をしました。これはつまり、社会的に愛のコードは特に女性に教え込もうとされていることを示しています。それは女性に対して男性と異性愛関係を持つよう促すためでしょう。ジェンダー論の領域では、異性愛が男女の非対称的なあり方に大きく関わっていることが明らかにされてきましたが、愛のコードはそのような状況を生み出すものとして社会的に機能していると考えられます。

ですが、やおいではこれまでお話ししてきたように、愛のコードを男同士の絆を表現するために利用し、また、それによって女同士のコミュニケーションを効率化しています。その一方で、やおいの作品上でもやおい好きの人が集まるコミュニティでも、男女間の関係は決して中心的にならず、あまり存在感がありません。私が思うやおいという現象のおもしろさは、女性たちが自分たちに与えられた愛のコードを異性との関係を作るのとは違う形で利用して、女同士のコミュニケーションを楽しみ、絆を育んでいるところにあります。

以上で、私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

（参考文献）

- 東 園子、2009、「女性のホモソーシャルな欲望の行方——二次創作「やおい」についての一考察」大野道邦・小川伸彦編『文化の社会学——記憶・メディア・身体』文理閣
- 東 園子、2010、「妄想の共同体——「やおい」コミュニティにおける恋愛コードの機能」東浩紀・北田暁大編『思想地図 vol.5』NHK出版
- Luhmann, Niklas, 1982, *Liebe als Passion: Zur Codierung von Intimität*, Suhrkamp. (=2005, 佐藤勉・村中知子訳『情熱としての愛——親密さのコード化』木鐸社)

〈古久保〉

ありがとうございました。東さんからは、やおいという二次創作をなぜ女の人たちが楽しむのかについてご説明いただきました。それでは続きまして、関西大学の守如子さんから、「やおい／BLはいかに語られてきたのか」というお話をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

〈守〉

守です。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。

最初に自分とやおい／BLとの関係なのですが、私はお二人とは違って地方の出身者なんです。時代にもよりますが、関東や関西という大都会でないと、なかなか同人誌に行き当たるのが難しいという状態があったのではないのでしょうか。大学まで全部地方で育ってしまったということもあってか、私自身は同人誌に行き当たらないままでした。同人誌体験といえば、友達が通販で手に入れたものを読ませてもらっていたぐらいです。ですから、やおい／BL作品を読むことができたのはほぼ商業誌だけなんです。やおい／BLテイストのある作品との最初の出会いは、先ほどシンポジウムが始まる前に堀さんに笑われていたのですが、たぶん『パタリロ』じゃないかなと思います。『パタリロ』を読みながら、「ここには何かある」と思っていたのですが、それが始まりといったところでしょうか。同人誌にどっぷりひたることができなかったのが残念な青春だったなと考えています。

本日は、「やおい／BLはいかに語られてきたのか」について話させていただきますが、網羅的に議論をフォローすることが主題ではありません。石田仁さんが「ほっといてください」とい

う表明をめぐって」という論文（『ユリイカ 総特集BLスタディーズ』青土社）で、最近盛んになっている「腐女子論」であるとか「やおい／BL論」に対して、やおい／BLを楽しんでいる当事者がそれらの批評を拒絶するような身振りを見せていると指摘しています。私は、なんで「ほっといてください」という身振りがあるかというと、やおい／BLに対するまなざしが、批判的であるとか否定的であるものが少なくないからではないかと考えています。確かに好きなものの話をされるのはこっぴどかしいといいますが、やおい／BLに限らず自分の欲望がストレートに反映されたものは、楽しんでいる本人にとって恥ずかしいものでもあります。ですが、やおい／BL論に対する思いは、単に“私の恥ずかしいことを語らないで”ということではなく、それ以上の何かがあるのではないのでしょうか。このシンポジウムを企画された腐女子研究会のみなさんと打ち合わせをしている時にも、“なんで私たちはこんなふうにはばかり言われるの?!”という話になりました。そこで、本日は「やおい／BLがいかに語られてきたのか」について、論争点をみなさんと共有するとともに、私なりの見方を提示させていただくことで、本日の議論のきっかけづくりができればと考えています。具体的には、東さんや堀さんが述べられたことと重なる部分も多いですが、第一に、やおい／BLを過剰に性的な表現としてとらえて批判する視線について、第二に、同性愛差別であるという批判について、第三に、やおい／BLを論じようとする議論（「やおい／BL論」）もやおい／BLを楽しむ女性を否定的にとらえてきた側面があったのではないかという点についてお話していきたいと思っています。

第一点目は、やおい／BLと性との関わりにつ

いてです。「やおい／BLは性表現か」ということに関連して、最初に、やおい／BLの定義について考えてみたいと思います。いろいろな方の「やおい／BL論」を探してみると、人によって定義が違うんですね。「男性同士の恋愛を描くマンガ・小説」と書く方も、「性愛を描く～」と書く方も、「性を描く～」と書く方もいました。「性」が入っている・入っていない、「愛」が入っている・入っていないということが、おそらく論者の議論のあり方を決定づけているのかなと想像しています。では、実態としてのやおい／BLはどのようなものなのでしょう。これを調べるために、私は2008年8月号（隔月の場合は7月号）のBLコミック誌を全部買い集めまして、すべての作品を開きまして、作品中にセックスシーン——まあセックスをどう定義するかというのもこれまた難しい問題でして、一応キスシーン以降のものが書かれているものをセックスシーンとして考えました——、セックスシーンがある作品とない作品をチェックしたんですね。雑誌毎にセックスシーンがある作品が多いか少ないかの順で、並べてみたのがこの表です。上の方にあがっている雑誌はほとんどセックスシーンがないものです。それに対して下の方にある雑誌は、ノルマシーンなのだろうと。要するに、全く性を描かない雑誌から、必ずセックスシーンを盛り込んで！という、性がメインであろうと思われる雑誌まで、本当に雑誌によって様々なテイストなのです。セックスシーンの厚みも作品によって全然違います。表の上の方にあげている雑誌では、セックスシーンがあっても、一コマ二コマで、セックスは暗示されるだけで終わってしまう作品ばかりなんですね。逆に、下の方にある雑誌では、セックスシーンが何ページも続きます。このようにジャンル内部に大き

な違いがあるわけですから、どのあたりを主眼にすえて議論をしているかによってもものすごく話が変わってくるでしょう。やおい／BLというジャンル全体を性的描写に重きをおいたものであるかのように扱うような議論があるとしたら、間違っているわけです。

また、読者の側にとってみますと、自分のテイストにあった作品を選べる状態になっているといえます。女性にとって「性」との関係は微妙なものになりがちです。性表現が苦手な人から得意(?)な人までいろいろな人がいます。性表現がない作品が好ましいと思っているのか、そうではなくてむしろセックスシーンを見たいと思っているのか、読者それぞれの「性」との関係のあり方によって選択できるのがあるところなのではないでしょうか。

セックスシーンが濃厚な雑誌に関しても、付け加えておきたいことがあります。先ほどの表の一番下に書きました雑誌は「コミックJune」といいます。この雑誌に寄せられた読者の投稿の文章を紹介したいと思います。:「コミックジュネって、Hがとってもハードですごいけど、ストーリーはけっこう純愛なのよねえ。すごく一途だったり、愛情表現が不器用だったり、愛のために一生懸命な姿って、なんか、とってもかわいくさえ思えてくるのです。どんなにHがハードでも、愛にあふれてるからコミックジュネはいくら読んでも飽きることなく、むしろどんどんのめりこんでいっちゃうのよね」。もう一つ紹介したいのが、読者から寄せられた、ある作品に対する批判です。:「今の時代何でも有りといってもボーイズコミックでこれはないでしょう…。読む気が無くなりました。ボーイズコミックはPURE LOVE重視でお願いします」。これらの読者投稿にあるように、セックスシーンが濃厚な

雑誌に対しても、読者の中には「純愛」を求めている人たちもいるわけなんですね。小谷真理さんが、『女性状無意識〈テクノガイナーシス〉』（勁草書房）に書かれていたように、やおいの特徴は、「性描写を克明に描いているにもかかわらず、基本的にキャラクター双方の愛の絆（すなわち純愛）を追求することが主眼となっている」ということが、はずせないところなのかなと思います。

ただ、それではなぜやおい／BLに性表現が含まれているのか、性表現の比重が高い雑誌まであるのはなぜなのでしょう。これは若者の性愛のあり方が変化したことと関係しています。たとえば1970年代の若者と現在の若者とを比較すると、性愛に関する考え方は、言うまでもないことかもしれませんが、かなり違ってきます。「性＝愛＝結婚」のロマンティック・ラブ・イデオロギーが主流だった時代には、セックスは結婚して初めてのものであるべきでした。現在は、恋愛と結婚が切り離されつつありますが、それは恋愛が重視されるようになった結果なのです。現代の若者は、この恋愛が結婚につながればよいのだけれど…、でもこの恋愛で本当にいいのだろうか…、次来るカードを待とうか…といった状態になりがちです。もしかしたらもっと素晴らしい恋人と出会えるかもという気持ちから、なかなか結婚に踏み切れない人が増えているわけです。「性＝愛＝結婚」の間の、「愛」と「結婚」の間に亀裂が入ってしまったために、「性と愛」が結びついたら、「結婚」の前に登場するのが近年の主流の若者の傾向ではないでしょうか。若者の性について不安を感じていらっしゃる方々も少なくないと思いますが、全般的にいうならば、若者が真面目に「恋愛」に向き合っているがゆえの性行為の低年齢化であって、不

真面目になったからでは決してないことを付け加えておきたいと思います。もちろん、性愛に関する状況は一人一人多様です。多様化が進んだというのが現在をもっともよく表した言い方になるのかもしれませんが…。このような、性に関する実態の変化に伴って、マンガももちろん変化してきているわけです。恋愛を描く作品ならば、どのジャンルであっても性が関係するようになってきています。一般的な少女マンガであれ、少年マンガであれ、別な世代向けのマンガであれ同じことがいえます。性が描かれることがあるのは、やおい／BLに特殊なことではありません。しかし、現在の社会の中には、性のダブルスタンダードというのがありまして、男性は性的な表現を楽しんでもいいとされているのに、女の人には厳しい目が向けられることは少なくありません。男性向けのエロマンガも、ボーイズラブ（BL）・ティーンズラブ（TL）も手がけてらっしゃる編集者の方にお話を伺ったことがあるのですが、女の子の親御さんから電話が来ることがあるとおっしゃるんですね。うちの娘がこんなのを読んでいた、編集者は何を考えているんだ、というような電話らしいです。男の子の親御さんからはそんな電話は来ない。多分男の子の親御さんたちは、想定していたと思うんですよ、そういうことがあるかもと。そしてそういうことがあったときに、どう対応しようかと考えてらしたと思います。でも、女の子の場合だと、もう想像もしていなかったからびっくりしちゃって、編集部には電話までかけてしまったのではないかと思います。先ほど司会の方から堺市図書館におけるBL騒動のご紹介がありましたように、私たちの社会は、女性が性を含んだ表現を楽しんでいることを過剰に批判的にとらえる傾向があります。そして女性が男

女間ではなく、男性同士の性や愛を含んだ表現を楽しんでいることを、過剰な形で批判しているというような状況がないか、私たちは常に見守っていく必要があるだろうと考えています。

次に、第二点目、やおい／BLが同性愛差別であるとする議論についてです。この論点に関してはざっくり二つに分けることができますと思います。一つは、特にこれはゲイ男性からの批判なのですが、ゲイアイデンティティを持たない「女性」が、男性同士という性愛を描いている、そのことそのものに対する批判ですね。それからもう一つは、作品中に同性愛を否定するような表現が含まれていることがあるという批判です。典型的な議論を紹介すると、前者に関しては、有名な「やおい論争」がミニコミ誌『CHOISIR』誌上で展開されたことがあります。佐藤雅樹さんというかたが「ヤオイがゲイをよく知らないままに、美化したままでいることこそが差別なのではないか？」とおっしゃっています。当事者の状況を知りもしないで、という批判です。後者については、溝口彰子さんが、やおい／BL作品の中に「俺はゲイじゃない。君だけが好きなんだ」というような決め台詞がよく出てくることを指摘しています（「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクリアなレズビアン」『クリア・ジャパン』Vol. 2、勁草書房）。「性別さえも乗り越えてお前が好きなんだ」という「究極の愛」を表現するためにこの台詞は使われているものの、逆にいうと、男性同士では愛し合ってはいけないとする「同性愛嫌悪＝ホモフォビア」を受け入れた上で成り立っているのではないかと溝口さんは論じています。

私自身の考えを述べる前に、一つ確認しておきたいのが、やおい／BLの読者は誰なのかとい

うことですね。よくやおい／BLは無前提に異性愛女性の楽しみとして論じられることが多いですが、腐女子だけでなく腐男子もいるよと。そして、異性愛者だけでなく、様々なセクシャリティの人たちがこの作品を読んでいるということです。たとえば、『コミックJUNE』の読者投稿に、次のようなものがありました。：ゲイであると名乗る男性からは「地方在住のため、気軽に買えるゲイ雑誌が身近にないので、BLはありがたい存在」ですという投稿や、女性読者からの「私は同性同士で付き合ってます！ Juneは身近でとても好きです♡（…っても性別は逆ですが…）」という投稿です。ですから、様々なアイデンティティをもつ読者にとって不快でない、よりよい表現を考えていくことは、もちろんすごく大事なことです。

佐藤さんの議論に対しては、多様な読者が読んでいるのだということ相互に理解していくこと、そして多様な作者が新たなやおい／BL作品を書いていくことしか結論はないだろうと私は考えています。ただし、佐藤さんのようなことを言っていたら、論文を書くこと自体ができなくなっちゃうなあとも思います。私は社会学を専攻していますが、学問って自分が直接体験していないことを論じたり書いたりすることもたくさんありますので…。

溝口さんの「ゲイじゃないんだ」という議論に関してはどうなのかという話ですが、一つは、「究極の愛」を表現するためだけなら、あえて「ゲイじゃないんだ」と言わなくてもいいのかもしれない。「究極の愛」を表現するための他の表現を模索していくことも一つの手なのかもしれないとも思います。ただし、今現状の作品を見ると、お互いがお互いを好きになっても葛藤を抱かないラブラブハッピーな作品といったらいい

でしょうか、男性同士が愛し合うことが当然であるような作品も増えてきているので、あまりこの「ゲイじゃないんだ」という決め台詞は減ってきているんじゃないかなという気もしていますが。

溝口さんの議論に対するもう一つの別な方向性ということで、竹内佐千子さんのエッセイマンガ『くされ女子！ In Deep』（ブックマン社）を紹介したいです。この本にはサブタイトルとして、「百合で腐女子のサチコとゆかいな腐友たち」と書かれています。竹内さんは、レズビアンとしての日常を描くエッセイマンガをこれまでたくさん書かれてきたのですが、この本では「実は腐女子な私でもありました」という内容を書かれています。この本の表紙の帯には、「だってだってBLはゲイじゃないもん!!「男なのに好きになっちゃった」から始まるストーリー!!」とあります。彼女は「ゲイじゃないんだ」という表現が好きだと言っているわけです。一方、この本の中で書かれている別なシーンでは、作者の竹内さんと、ゲイの大学生の男の子たちとが仲良くしゃべっている次のような会話の場面がみられます。腐女子の友達が欲しいと言う男の子たちが、「あ、でも俺、腐女子でBL好きだけどリアルはダメって言われるのはヘコむ」と言うと、竹内さんは「確かに百合好き女子にリアルレズきもいって言われたらムカつく」と答えています。このやりとりを考えてみたいと思うんですけども、相手に対して「リアルレズきもい」というのは完全に差別の表現です。ですが、「リアルはだめ」というのは違う内容を含んでいる可能性があるんですね。何を言いたいかと言うと、先ほど堀さんが紹介してくれましたが、女性向けの性の表現というのはTLであるとか、レディコミであるとか、BLであるとか、ど

れも全てマンガなんです。要するに、女の人たちが好む性的なフィクションは、写真や映像で表現されるような“リアル”じゃだめなんですよ。もしかしたら、自分がフィクションとして楽しめるものは何なのかということ表現しようと思って、例えば、自分は「ゲイAV」は好きではなくて「BL」というマンガじゃなければだめなんだということを表そうと思って、「リアルはだめ」と言っているだけかもしれないわけですね。世間には多様なセクシュアリティがあって、そのセクシュアリティがすべて認められるべきであるということをおいつつ、私は「リアルはだめ」です、ということはある程度。ただし、自分のファンタジーの好みを述べただけのつもり「リアルはだめ」という言葉が、相手に「リアルゲイきもい」という意味に受け取られてしまったら大きな問題です。現実の関係性と、フィクションというのをきちんと分けて理解することはとても大事なことだと思います。作者の竹内さんは、レズビアンである自己を肯定していて、ゲイの男の子の友達とも楽しく交流しつつ、フィクションとして「ゲイじゃないんだ」から始まるストーリーを楽しんでいるわけです。この姿勢に学ぶところは大きいのではないのでしょうか。

この点に関連して、堀さんは、「ヤオイはゲイ差別か？」という論文で、この「ゲイじゃないんだ」という発言に対する新たな見方を提起しています（好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』、明石書店）。やおい／BLとは、ゲイの恋愛を描いた作品ではなくて、セクシュアリティの揺らぎを表現するジャンルだと解釈することができるのではないかとのご指摘です。私はとてもなるほど!と思いましたので、付け加えておきます。

最後、第三点目が、「やおい／BL論」のあり

方の変化についてです。金田淳子さんが、やおい論を概観して、次のように言っています（『マンガ同人誌』吉見俊哉編『文化の社会学』有斐閣）。やおい論は、以前はやおいを楽しむ当事者を異常であるとか逸脱であるとかみなすような議論がすごく多かった。それが近年変化し、やおいの魅力とは何かを問うものに、やおい論の視点自体が変わってきた、と。今回のシンポジウムでも、堀さん、東さんのお二方からやおいの魅力というのはいったい何なのかというお話がありましたが、今大事なのは、やおいの魅力は何かをもっときちんと論じていくことではないかと思います。

たとえば、いち早く『やおい小説論』（専修大学出版社）を書かれた永久保さんは、なぜやおい／BLはそもそも男同士なのかについて論じられています。永久保さんは、一つには対等な恋愛を描くためであると指摘しています。男性同士という関係性を使うことで、友情と恋愛を両立させる関係を描き、ジェンダー的対等性への志向がうまく実現できる。それともう一つは、男同士であることによって、ジェンダーの娯楽化がなしていることを指摘されています。性別が同じであることによって、二人の差異は性差に帰されることがなく、純粹なる個性とすることが可能になっている。読者は、男性同士であることによって初めて、男らしさと女らしさをロールとして、抑圧を排除して楽しむことが可能になったと論じられています。なぜ男同士なのかを否定的批判的なスタンスではなく、魅力の内実を語るという切り口によって語っていくこと、このような議論のたてかたが重要なのではないのでしょうか。

最後に、私自身が男同士であることの楽しみをどのように捉えているのかということの一つ

付け加えて私の話を終わりにしたいと思います。最近、私は「ポルノグラフィ（マスターベーションに使われる性表現）」に関する研究をようやく本にまとめ終えたところなのですが、レディコミ、ティーンズラブ（TL）、ボーイズラブ（BL）の、それぞれ一部が、女性向けの性表現になっています。先ほどボーイズラブについて、性表現の濃度が雑誌によって異なっていることを紹介しましたが、TLやレディコミの一部にも性表現がメインになっているジャンルがあるわけです。これらの性表現がメインになっているジャンルに関して、調べをすすめていきましたところ、男女の性行為を描くレディコミ・TLもやおい／BL出身の作家が少なくないことがわかりました。女性の表現者にとって、性を描く際に、男女ではなくて男性同士が選ばれるのだということがとても興味深かったんですね。なぜ男性同士が選ばれるのでしょうか？堀さんの話にもありましたが、やおい／BLは性表現を見る際の様々な視点のとりかたのうち、第三者的な視点を強化する部分があると思うんですね。攻めと受けの両者の快楽が描かれるやおい／BLは、読者を性表現に感情移入させるというよりは第三者的な視点に立たせます。あるいは、読者を作者や神のポジションに立たせるといったらわかりやすいでしょうか。第三者的というのは俯瞰的な視点という意味ですから、性表現から読者は引き離れ、安全なポジションに立つことができるわけです。そういった意味で、性を表現するとき、やおい／BLは表現しやすいのではないかと考えました。

自分自身の研究は一言になってしまいましたが、まだまだ議論されていないテーマがあると思いますので、これから皆さんとやおい／BLの様々な魅力について語れたらなと思っています

す。どうもありがとうございました。

〈古久保〉

ありがとうございました。たいへん刺激的なご発表で、性表現をみる視点におけるジェンダーの存在を考えさせられました。

さて、ここからはコメンテーターの秦さんと増田さんにもご参加いただければと思っています。堀さん、東さん、守さんのお三方のプレゼンテーションが非常に中身の濃いいろんな問題を提起していただきましたので、つづいて、まず、秦美香子さんの方からコメントをお願いしたいと思います。

〈秦〉

よろしく申し上げます。秦です。まず最初に、お三人の方と同じように私とやおいの出会いということを自己紹介に代えて申し上げておきたいと思います。直接やおいと呼ばれる作品を初めて読んだのは、今市子さんの作品です。もっと精神的な面でのやおいとの出会いはシャーロック・ホームズのシリーズです。子どもの頃よく読んでたんですけど、一番好きなのところが、ホームズが死んだと思っているワトソンが落ち込んでいるところなんです。それがきっと私とやおい世界を繋ぐポイントではないかと今日気づきました。

私はまず、どの報告も、第三者的な視点から読めることをやおい／BLの消費の特徴としてあげられているところが共通していると思いました。東さんは直接はそうおっしゃってないですけど、堀さんと守さんが言われた、読者が第三者的な視点から二人の登場人物を眺めることができるというのは、東さんが言われている原作の中に出てくる相関図を消費するという図式

とかなり重なると思いました。これはひとつにはやおいの特徴だということには私はすごく納得しているんですけど、その反面、第三者的な視点から複数の登場人物の関係、相関図を消費するという事自体は、少なくともごく最近の話では、だんだん女性限定という消費の方式ではなくなってきているのではないかなと思いました。たとえば、ネットに「スパイシー」というサイトがありますよね。人と人とのつながりを勝手に見つけて、この人はこの人とのつながりがあるとかをどんどん画面上に表示していくタイプのもので、あり得ない関係とか勝手に作られていたりとかする場合も多いのですが、あれが何がおもしろいのか、私は全然わからないんですね。今もちょっとわからないんですけど、あれを思い出してみれば、あれを見て楽しめるというのは、やっぱり相関図自体がおもしろい、この人が意外とこの人とつながっていたんだとか、この人とこの人は近いんだな、この人とこの人は遠いんだとかそんなのがおもしろいかなと最近思うんです。それも広い意味では相関図消費というところに関わってきているんじゃないかなと思いました。三人の方に聞きたいのは、そういうものの消費のあり方と、やおいでいうところのカップリングを見て楽しいという相関図消費と、違うとすれば何が違うのか教えていただけたらと思います。多分全然同じものではないと思うんですが。

それからもう一つの質問は、特に東さんに聞きたいことなんですけど、東さんは報告の中で、やおいは「愛のコード攻め」の「人物相関図受け」と出されていましたが、私はこれを聞いたときに、「人物相関図攻め」の「愛のコード受け」なんじゃないかなと思ったんです。私になぜ「人物相関図攻め」「愛のコード受け」と思ったかと

いうことを言うておくと、ちょっと東さんのレジュメの1ページの5番目の相関図消費を絵で描いてあるところを見ていただきたいんですけど、これは多分東さんが架空の作られた原作の相関図だと思うんですが、原作の相関図で、AさんとBさんが仲間で、CさんはBさんをライバル視していて、AさんとCさんは反目しているという関係が原作に書かれているという図が載っています。例えば読者がこの原作を読んで、なぜ、AさんBさんCさんはこんな関係になったんだろうと思ったとします。これは原作の中では十分に説明されていないから、読者はそれを自分の中で合理的に説明しないとイケないということになります。そこで、AさんとBさんは仲間ということになっているけど、本当は恋人なんじゃないかなとか、AさんとCさんは反目しあっているけど、CさんはなぜAさんと仲間であるBさんのことをライバル視しなければならないのか、それはきっと内心Aさんのことが好きだからだ、だからAさんとCさんがきっと恋人になるんだとかとか、いろんな仮説がまず考えられるんじゃないかと思うんです。その仮説をどうやって立てるかというところに、おそらく東さんが言っていた愛のコードというのが出てくるのではないかと思いました。AさんとBさんが恋人というパターン、AさんとCさんが恋人というパターン、どっちの仮説がより確からしいかということを考えて、選択された方の仮説を作品にするのが、やおいの二次創作なんじゃないかなということをお私に考えました。もしそういうふうに作品が作られているとすれば、愛のコードを使ってはいるけれど、愛のコードから関係を読み解いているとしても、この相関図に逆らって愛のコードを使うことはできないんじゃないかなと思うんです。東さんは、やおいというのは女性たち

が自分たちに与えられた愛のコードを正しくない形で利用しているんだ、というふうに言われましたよね。ということは、相関図消費というものが、愛のコードを攻めているという関係がやっぱりここにも表れているんじゃないかなと思って。それで、愛のコードを攻めと言った東さんの理由が聞きたいと思いました。というのは、私はもう一つ東さんに聞きたいことがあって、それと関係してくるんですけど。愛のコードを攻めと考えるならば、愛のコードは、やおいを作るに当たって相関図消費よりも優先されるような強いものということだと思うんですね。でも、二次創作をするときに、愛のコードというものが、何でそんなに強いものでなければならぬのかと感じるんです。これはやおいをそんなによく知らないからそうってしまうのかもしれないんですけど、たとえば男性同士の絆とか絆の深さとか親しさとかを表現するためには、少女マンガの中では時々家族のコードを使って、この人とこの人はほんとの家族じゃないけど家族みたいだと思って思わせることでその関係の深さを表現するというパターンもあると思うんです。けど、そういうものは全然使わないで、二次創作の中で原作をあくまでも愛のコードを使って読み解かなければいけないというルールが共有されているのがなぜなのかなと思って。それはたぶん、単純に恋愛とかを書くが一番おもしろいってみんなを感じるからってぐらいの話なのかなという気もするんですが、何かほかに理由があるのであれば、愛のコードというものがどうしても使われなければならない理由というのを知りたいなと思います。

〈古久保〉

女性限定の消費ではないのかということころは

皆さん全体にかかってくるので、それは皆さんで後でまとめて答えていただくことにして、東さん、集中的にお尋ねがありましたので、その部分を「愛のコード」×「人物相関図」、この攻め受け図式でいいのかという話、そのあたりをお願いしたいと思います。

〈東〉

秦さん、ありがとうございます。今秦さんが言ってくださったことって、まさにやおいの楽しみの一つを表していたと思うんです。どちらが攻めでどちらが受けだと思うかについて議論するのはカップリング論争と呼ばれる、やおい系の腐女子たちがよくやっていることです。ですから、秦さんがやおいの楽しみ方をこの前で実演してくれたなと思って、聞いていました。

原作を見てなぜこういう関係なのかと想像して、色々な仮説が考えられる中でこっちだと思った仮説を作品にするので、人物相関図に逆らって愛のコードを使うことはできないんじゃないのか、という秦さんのまとめは、まさに私の考えていることです。では、どこで私と秦さんの意見が割れるのかということ、攻めと受けをどういう役割だと思うのかということなんですね。それは腐女子の間でもなんとなくイメージが共有されていても、ずれがあったり好みの違いが出てくるところで、だからこそ色々なやおいが生まれて、色々なやおいを読む楽しみにもつながるんです。

私がなぜ愛のコードを攻めと思ったかということ、愛のコードが人物相関図に働きかけるという関係だととらえたからなんですね。つまり人物相関図がそのままのものとしてあるところに、愛のコードが「俺色に染めてやるぜ」みたいな感じで働きかける。私は「働きかける側に攻め」

というイメージなので、愛のコードを攻めにさせてもらいました。ちなみに、やおいでは実は受けの方が力が強いというか、受けメインの世界なんですね。攻めは受けにご奉仕するような関係も多々ありますので、そういう意味でもやっぱり人物相関図は受けかなと私は思います。

ついでに、他のコード、たとえば家族のコードや兄弟のコードではだめなのかといえば、そうとも言えないところもあります。女性向けの二次創作同人誌の中に、家族パラレル、ファミリーパラレルと呼ばれるものがあるんですね。それは登場人物たちの中で、あるキャラをお父さん、あるキャラをお母さん、あるキャラを子ども、みたいに家族関係を設定して、それで家族のお話を作るものです。なので、必ずしも愛のコードを使うわけではないんですけども、愛のコードを使ったものが多い。

その理由は、私の報告でお話ししたことに加えて、愛のコードはすごくコードとして発達していることがあると思います。恋愛は物語でさんざん描かれてきているので、「こういうときにはこういうふうに思うはずだ」みたいなパターンが家族などよりも発達しているので、一番使いやすいというのもあるでしょう。

また、家族のコードを使うには、仮の家族関係をまず設定して、その上で家族のコードを使うという二段階の作業が必要になるんですけど、恋愛感情はどんな人間関係でも発生しうるとされているので、愛のコードはいきなり当てはめられるという便利さもあると思います。

〈古久保〉

愛のコードが使いやすい、という面もあるわけですね。

それでは次に増田さんの方からコメントをお

願いしたいと思います。

〈増田〉

初めまして。増田と申します。大阪市立大学の文学研究科に属しております。

今、腐女子的な世界が壇上で展開されているわけですし、そこに絡めて「私とやおい」を語れということですが、明らかに私、場違いでございまして、腐女子はおろか腐男子でもございませんで、そもそもやおいとのがなれそめも何もないわけですね。

私の専門はポピュラー音楽研究です。ポピュラー文化として音楽を扱うことを専門としておりまして、やおいに関してはほとんど知識がなく、全く無知といってよい。ただ、むりやりになれそめを考えてみますと、私、高校卒業まで北九州市で育ったのですが、最初に「やおい」という言葉を聞いたのは、確か高校生の頃だったように思います。87年か88年、その頃ではなかったか。守さんはさっき田舎ではやおいに出会わなかったとおっしゃったんですけど、私の場合、北九州市の中心街の一つだけ、アニメショップがありまして、そのコピー機のコピー代が安かったんですね。バンドスコアなどをコピーしに（ああ、それはまずいのか）行ったりしていたんですけど、その店でコピーしながら並んでいる同人誌の表紙を眺めると、どうもきれいな男二人のイラストが目立つよね、みたいな感じで、マンガ描く女子の間でこういうのがはやっているのかな、などと思ったりしまして、そんなかたちでやおい的な世界と最初の接触を果たした記憶があります。

コミケらしきこと、同人誌即売会らしきイベントも店の張り紙を見ると北九州市でもぼろぼろ行われていたようで、それらにコミットして

いるのはどうも同年代の女子で、男性同士のカップリングを描くのが流行っているのかな、ということも80年代後半に知り、そのころ「やおい」という言葉も知った、というのがなれそめです。そのときに最初に知ったやおい作家の固有名詞というのが、えみくりという名の、かなり昔から活動している大阪の方ですよ。私は作品読んだことないんですけど、大阪のえみくりというグループがすごいらしい、といったその当時の評価を聞きまして、思ったことがあります。

音楽をやっていると、基本的に田舎では十分に全うできないものになってくるわけですね。シーンの中で自分の音楽が高い評価を得ていくためには、大都市、端的に東京で活動していかなければいけない。日本のサブカルチャーには上京主義とでもいった意識が根付いているものが多く、とにかく東京に行かないとものにならないという感覚が私など非常に強かったわけなんですけど、なんだかやおいというのは北九州のような地方都市でも同人誌とか売っているし、みんなまったりして楽しそうだな、といった感じで、自分はあまり興味ないながら認知したのが最初です。それからもう20年ぐらいたちまして、日本のポピュラー文化の一つとして、研究関心を集めていることは横から見知っておりましたが、やおいの作品について愛着を抱くことはまったくありませんでした。

今回のシンポジウムには、後で壇上に上っていただく石川優さんから無理やり引っ張り出されたんですけど、先ほどここに来場されたオーディエンスの方々のリストを見ますと、私などよりずっとここに座るのがふさわしい、男性であったとしてもふさわしい方が軽く10人はおりまして、何かの罰ゲームではないかといったような感慨を抱きつつここでしゃべっているわけです

けれど、まあとりあえず、今回のシンポジウムの準備のため、守さんや堀さんの著書、東さんの論文などを読ませていただいてやおい研究について付け焼き刃で勉強してきました。やおい作品にはまったく愛着を持たない、逆に特段の嫌悪も抱かない私ですけれど、付け焼き刃で諸々の研究を読んでいくうち、大衆文化論の観点からはなかなか面白いジャンルだなと知的関心を触発されるところがありました。『ユリイカ』誌で2007年にやおい特集が2回組まれています。それ以降、外野から見ると非常に研究活動が活性化している印象がありまして、一つの大衆文化としてのやおい／BLカルチャーが、外から見たとき、すなわちその対象への愛着に巻き込まれてない立場から見て、どのように映るかということについて簡単にお話したいと思います。

『ユリイカ』の諸論文であるとか、皆さんのやおい研究を読んでいて、まず最初に私が抱く印象は、とにかくみんな論じているその対象が大好きなんですね。やおい大好き。ようするに研究家の立場と愛好家の立場とがほぼイコールになっている。好きだからこそ語る。かつて宮台真司はサブカルチャー研究におけるこのようなあり方を、ややネガティブなニュアンスを込めつつ「好きなもの研究」と呼びました。サブカルチャーの研究は好きなもの研究になりやすい構造があって、それではよくない、といったことを言っているわけなんですね。私自身も音楽を研究対象として扱うときに、好きなもの研究にならないようにしなければ、という方向性、自分の愛着と理論的な研究関心をできるだけ切り離す、あるいは愛着と研究関心の関係を明らかにする、そういうスタンスでなければサブカルチャー研究は成り立たないと思ってやってきたつもりなんですけど、やおい研究、非常にう

らやましいんですね。好きであることから始まる、ということが自明である。好きだからこそ掘り下げて研究する。愛着と研究とが一体化して結びついている。

もちろん、そのようなスタンスがやおい研究においては必要とされてきた研究史的文脈が当然存在しているわけです。やおいは女性のサブカルチャーであって、男性的な文化観から見逃されてしまいがちなところがある。さらに、女性の中でも公言がはばかれるマイノリティのサブカルチャーであるという立場があり、腐女子であるということは女性の中でも公言しがたい状況がある。そういう二重の、抑圧とっていいのかわかりませんが、少なくとも学術的、理論的な関心からも取り上げられにくい社会的ポジションに位置するサブカルチャーがやおいです。そのため、愛好家自身が立ち上がらざるを得なかった歴史的必然性があったんじゃないか、そんな気がするわけです。

ただ、好きなもの研究というのは、やおい研究のように必然性が存する場合もあるわけですね。それ自体がまったくダメだ、というわけじゃないんですけど、愛着に基づく知的関心は、その裏返し、嫌悪を伴う無関心と表裏一体のところがある。そのために研究上の争点になるポイントが、愛着あるいは憎悪、嫌悪といった感情的フックを生み出しやすいファクターに集中する傾向があるような気がしています。具体的に言いますと、性的なファクターというものが、やおい／BL文化の中心的な核であるといった認識が、やおい／BL文化を論じたり、あるいは嫌悪したりする人々の間で共有されている。やおい／BL文化は本質的に性的なものであるという認識は、奇妙に愛着側と嫌悪側で共有されているような気がするわけです。

その性的なものの表れ方についての評価に関してはいろんな立場があるのですが、やおい作品において性的なものがどのように表象されているかというメカニズムに関してはお三方の発表で門外漢でもよくわかるんですけども、性的なファクターを除外した場合のやおい、それはやおいじゃないかもしれないんですがあえて除外して考えるとしたら、現在のやおい／BL文化というものには、他のポピュラー文化と比べてどのような特性があるのだろうかということに、私は関心を抱くところがあります。

ポピュラー文化としてやおい／BL文化を見たときに、私にとってもっとも印象深いというかポジティブに評価する側面として、バナキュラリティといいますか、私は「根ざし感」と言ったりしますが、やおいという作品文化、あるいはそれを創作している人々、それからそれを取り巻くファンや消費者の行動の構造、といったものが、身近な生活感覚に深く根ざしているところに発しているように思えます。外部の評価、何か外在的なところからのオーセンティシティを必要としない、その文化に真正性をもたらすファクターが外部に依存していない印象を持つわけです。このことはポピュラー文化としての音楽と比べてみると明確なんですけど、たとえば、ジャズというサブカルチャー音楽があります。これは、アメリカの黒人文化の中から発生し、日本にも大正から昭和にかけて輸入され一世紀近く経つわけですが、いまだにその文化の真正性を測るものとしてアメリカ黒人の文化が規範的に参照される。つまり日本人がジャズをやっているのもそれは借り物である、とか言われ、実践への評価は外在的なところからやってくるという構造から完全に自由ではない。それに対して、やおい／BL文化というのは、そう

いった外在的な真正性に依拠せず、その文化が良いか悪いかといった価値評価については、実践者たちが属している社会空間の中での自前の価値基準をもちいて文化を生産し、消費し、流通させている。そのような根ざし感、バナキュラリティの高さ、文化の自生性とでもいうべきものが、やおい／BL文化の、他のサブカルチャーと比べて私よりもっとも特徴的と感じる点です。

やおいにとっての外在的な真正性といいますのは、例えばスラッシュフィクションというものがあまして、アメリカで、「スタートレック」の登場人物の) カールとスポックはどっちが受けなのか攻めなのか、といったような同性愛的フィクションをつむぐカルチャーがあるわけですけど、さきほど桑さんに伺ったところでは、どうも日本のやおいの人で、そのようなスラッシュフィクションを好むどころか存在を知っている人すらかなり少数派だろうということでした。おそらく同類の文化なんでしょうけれども、やおいにおいてはそのような海外の類似ジャンルに由来する真正性規範が、日本の文化実践に影響を及ぼすことがない。海外の同類の文化、たとえばロックのような音楽であれば「やっぱり本場はUKだぜ」といったような話になると思うんですけど、やおいの場合そうならないんですよ。それはマンガという文化ジャンル自体が日本性といいますか、日本社会と強く結び付けられて観念されていることにもかかわると思うのですが、現代の日本の漫画文化も、そもそも手塚治虫がディズニーのアニメーション技法を導入して、といったところから発したものであって、完全に日本国内で自生的に生じたものではない。

東浩紀さんは『動物化するポストモダン』（講談社現代新書）の中で、オタク文化が近代以前

の江戸文化から連続しているという俗説を否定し、マンガやアニメを（江藤淳や岸田秀が指摘するような）アメリカ文化の圧倒的な影響の元におかれた日本の文化空間の中で発生した、アメリカニズムに対する屈折した形の反抗の表現である、といった指摘をしています。やおいについては、そのようなアメリカニズムへの屈折した関係が少なくとも私には感じられないんですね。そのことはひょっとしたら、男性マンガのサブカルチャーと言っていいのかわからないんですけども、アメリカの影響のなかで形成されてきた日本のサブカルチャー空間が、アメリカに対抗する日本、という屈折した対立関係の中で自生性、バナキュラリティを失ってしまうとするならば、やおい／BL文化の旺盛なバナキュラリティとは、日本の男性優位的な社会に対する女性性という対抗関係、とでもいったような、男性マンガ文化とは異なる対抗性の文脈が背景に存することから発しているのかもしれない。このような見立てについては、僕は門外漢なので印象論でしかありませんので、この印象が妥当かどうか後でちょっと伺いたいと思います。とりあえず一点、やおい／BL文化について私が指摘しておきたいのは、性的なファクターを除いたときの文化的なバナキュラリティについて、ということです。

あともう一点、これは私の専門テーマであるポピュラー音楽の作者性、オーサーシップの問題系と関連する話です。多くのサブカルチャーでは、作者の崇高性が高い価値を持つ構造がしばしば観察されるのですが、やおい／BL文化のオーサーシップの構造はちょっと面白い。これはBLというより、やおいの二次創作に顕著なんです。単純に他のサブカルチャーの中でのオーサーシップの価値を単純に適用するわけにはい

かない。先行して存在する原作において提示される誰かが作った世界設定、あるいはキャラクターを流用し、読者の趣味に応じた形で組み上げる創作実践が盛んに行われているわけですね。そこでのオーサーシップはどのような構造と価値を伴うのか。

さきほど守さんの話で、女性向けポルノには第三者の視点というものが確保されているという指摘があり、「神の視点」という言い方をされていて、とても面白かった。やおいの二次創作文化では、ある意味で、ロラン・バルトの理想のようなものが空前の大衆的規模で実現されているような印象がある。つまり、権威であるとか作品の価値の源泉であるような「作者」が、ごく自然な形で無化されており、「作者は死んだ」というフレーズに象徴されるような事態が当たり前前に生じているような印象を抱くわけです。

ご存知の方もおられるかもしれませんが、2002年から03年にかけて、「先発優先提言」事件と呼ばれる騒動がありました。これは、当時インターネット上で、オリジナルJUNE小説をアップロードして楽しむシーンがありまして、ある人が連載していた小説が他人の「パクリ」だ、と批判を受けたことが発端です。その小説は歴史物で、平安時代の宮廷内の人物間の受け／攻めが描かれたものでした。その設定であるとか、キャラ設定やカップリングが、既に発表されていた別の小説の「パクリ」である、という指摘があり、パクられたと感じた人やその周囲の人々が「パクった」とされた側を糾弾し始めたんですね。その糾弾行動は、キャラ設定などが被るJUNE小説は、「先発」（先に発表した側）に優先権があるから、後発の小説は自発的に取り下げよう、といった「提言」を呼びかける運動に発展した。ところがこのような、キャラ設定やカッ

プリングの優先権を主張した「提言」には、著作権法上の根拠があるわけではもちろんなく、逆に周りのネットワークからは自由な創作を制約するものとして猛烈な批判を浴びることになりまして、最初に「パクリ」を糾弾し「提言」を呼びかけた側が平謝りしたという事件がありました。この事件、僕はリアルタイムでは見てなかったんですが、ネットワーク仲間間で当時ちょっとした話題になっていたのを記憶しています。今でも「先発優先提言」集い跡地」(<http://www.geocities.co.jp/Bookend-Yasunari/6974/>) というウェブサイトがかるうじて残っていますので、そちらで概要は確認できると思います。

この事件を見てまず印象に残るのは、「カップリングをパクった」と最初にいちゃもんをつけ、結果的に誤りを認め謝罪した側の人々の、その謝りかたが尋常ではないんですね。ものすごい、もう何というかとにかく平謝り、自己批判の嵐といった感じで、その謝罪文や経緯の説明などを読んでみると異様な感じがするんですね。ここまで謝らなくてもいいだろうと思うくらい徹底的に謝罪し自己批判してまして、小説執筆やネットをやめてしまった人すらいる。この異常なまでの謝罪の姿勢、ある種のタブーに触れたかのような振舞いをどう解釈するかということは、昔からずっとひっかかってまして、いまだに結論はでていないのですが、おおまかにはこのようなことはないかと考えています。つまり、一般的に文化的な「パクリ」、他人が作り出した何かを自分の作品の中に勝手に流用する行為は、サブカルチャーの中でしばしば倫理的な摩擦を引き起こすのですが、やおい的な二次創作文化においては（この一例だけで一般化はできないとは思いますが）、一つの世界を構築、あるいは一つのカップリングを生成させる作者

性が持つ権力、あるいは所有性が、文化の中で占める位置がちょっと異なっているように感じられる。他のサブカルチャーのように、「強い作者性」のようなものを前提とするわけにはいかない気がするのです。このことに関してはあまり考えがまとまってないのでなんとも言えないんですけど。

それに関連して、東園子さんが『思想地図』5号（NHK出版）に書かれた相関図消費概念についての論文がすごく面白かったのですが、その中で東さんは、やおい文化では整合的なカップリングを解釈により生み出すことが重要で、二人のキャラクターを選び、それをどのように受け攻めに配置するかといった二次創作者のカップリング解釈は、文芸批評の営為とよく似ている、という指摘をしています。原作中の二人のキャラクターの関係に対して、「愛のコード」による解釈でカップリングを見出し整合的に「読み替える」営為は、現代思想用語や批評用語のコードを使って文学作品を解釈していく文学研究の作業とある意味で同じだ、ということですね。

で、そう考えていくと、文学研究では学問的発見の先取性とオーサーシップが結びつく構造があって、あるオーサーが最初にこの事実を指摘した、あるいはこの解釈を最初に提示したのは誰だ、といった研究上のオーサーシップが、研究コミュニティの中で重要視される構造があるわけですが、やおい的な空間の中でのカップリング解釈のオーサーシップはどうなっているのだろうか、という興味湧いてくる。腐女子たちが見いだしていくキャラクター間のカップリング、ようするに新しい相関図を生み出す解釈行為について、やおい文化の中ではどのように「作者性」が関わっているのか、ある

相関図が所有の対称になるといったようなことがあるのか、といった論点について、ちょっとコメントいただけるとありがたいです。以上です。

〈古久保〉

ありがとうございました。ポピュラーカルチャーの一つとしてやおい文化をみたときに特徴的に見える自生性というものをどう評価していくのか。あるいは、ポピュラーカルチャーの作者性というものに重きを置かれないやおい文化というものをどう評価していくのか、それらの特徴はなぜゆえ生じるのか、このあたりがコメントの内容だったと思います。

それでは、秦さん、増田さんのコメントへのリプライを、堀さん、東さん、守さんの順でお願いします。

〈堀〉

まず、第三者的視点が女性限定の消費の仕方ではないのではないかということなのですが、もちろんそうだと思います。ただ、他のジャンルと比べたときにその描かれ方が多いことが特徴的だとは思いますが。増田さんがおっしゃっていたように、ポピュラーカルチャーにしても、文化を語るときに何か男性的な語り方があるんじゃないかなという気がしていて、その見方があまりに偏っているんじゃないかな、と私は思うところがあるんですね。

もちろん男性向けの作品でも第三者的視点を大切にしている作品はたくさんあるし、女性向けの中でも、非常に男性的な構図を用いている作品もたくさんあるのですが、女性向けの場合、第三者的視点が特徴的なんじゃないかと思いません。

増田さんのコメントについては、性的なものを抜いたときにやおいとかBLのおもしろさがどう変わるのかということで単純化させてお話をさせていただければ、あまり変わらないんじゃないかなというのが、私は実感としてはあります。

つまり、性的なものは大事ではあるけれど、性的なことを描くための作品ではないということです。恋愛を描いていて、その延長線上に性的なものがあると私はとらえているので、それを切り離すことはできないし、また、性的なシーンというのは、それぞれのジャンルの特徴が表れているので論じるにはおもしろいのですが、やおいというジャンルをそこに集約するのはちょっと難しいんじゃないかなと思っています。

〈東〉

まず秦さんの方の、相関図消費的なものは別に女性向けに限らず楽しまれているのではないかというのは、まさにおっしゃるとおりだと思います。相関図消費という言葉を作ったことで、男性向け文化など色々なものの中からそういうものを見いだしていってもらえたらなと思っています。ただ、女性の方が関係性に目を向けやすいという特徴はもしかしたら言えるかもしれない。そして、それにはきっと社会のジェンダー的な構造が関わっているのではないかと考えています。

あと、増田さんから、やおいの新しいカップリングを生み出していく行為に対して作者性がどう関わっているのかというご質問がありました。増田さんがおっしゃったように、確かに同人誌の世界でパクリが問題になることはあるんですけども、二次創作のやおいで誰がそのカップリングを見つけたかということに関しては、そんなに作者性みたいなものは主張されないと

思います。

それは、一つにはカップリングというのは腐女子が無から作り出すものではなくて、すでに原作の中で描かれていることから見いだしていくものなので、ある意味そのカップリングを作ったのは原作であって、それが自分のオリジナルのものだとは主張されないわけです。

加えて、オリジナリティを主張する場合、その解釈を思いついた人が少なければ少ないほどその人の特権性が上がる面があると思うんですけど、やおいの場合は、自分と同じカップリングをしている人が多ければ多いほど楽しいんです。色々なやおいが読めるし仲間も多いわけですから。なので、希少性が利点にならないことになります。マイナーなカップリングは「茨道」と呼ばれて、「茨でつらいです」みたいなことがよく言われています。

あと、やおいのマンガや小説って腐女子同士のおしゃべりの中から生まれてくることもあるんですね。私自身もやおい同人誌を書いている友達とある作品の解釈を巡って議論していたら、その子が、私が言ったことをそのままやおいに描いたことがありました。それを読んで、「これ、私が言ったんじゃないの」って思ったんですけど、それは友達とおしゃべりの中から生まれてきたものだから、やっぱり私と彼女のどちらかに所属するとは言えない、二人の間で生み出されてきたものだとも思うわけです。やおいでは、他の人の同人誌を読むことで触発されて、新たな解釈が生み出されることも多いと思います。なので、作者性みたいなものがまったく感じられていないわけではないと思いますが、どこが自分のオリジナリティといえるのか明確でない側面が、二次創作のやおいにはあるのではないのでしょうか。

〈素〉

割り込んですみません。

私が聞いたかったのは、別に三人が言っていることは、相関図とか第三者の視点とか言っちゃっているけど、こんなの女ものの特徴じゃないよ、ということを書きたいわけではなくて、こういう第三者的な視点を持つとか、相関図を消費するというやおいのあり方が、やおいの特徴であるということはすごく納得がいくんですけど、それはあくまでもやおい固有のものとして示されるべきものなのか、それとも違うものをもこういう視点で見ることができると考えられるのかなんです。

〈守〉

そうですね。

世間に、今回東さんが指摘されていた愛のコード以外にもいろいろな人物関係の読み解きというのがあると思うんですよ。典型的には、陰謀史観はどうでしょうか。たとえば、誰と誰とが実は暗躍していて、みたいなことをインターネット上で議論しているのをみると、あれはあれで一つの読み解きなんですよ、多分。関係性のありようをいろいろ読み込んでみる、あるいは何か特別な関係がそこにあるのではと勘ぐってみる…といった思考は、やおい以外にも様々な形であると思います。

増田さんからの「研究者がイコール愛好家になっている」というご指摘に関してですが、女性のサブカルチャー研究は確かに現状としてそうであるとは思いますが。ただ、女性のサブカルチャーはまだまだ下に見られたり、学問の議論からきり捨てられたりする傾向がありますから、愛好家が内在的に語る必要性は薄らいでいないと考えています。

また、やおい／BLが、これが国内に閉じているかどうかという話なんですけど、たとえば、典型的な美少年ものにおける海外嗜好みたいなことはあります。JUNEなんかはほんとに海外の話っていうのがすごく多かったと思うんですよね。ボーイ・ジョージであるとか、そういったJUNEっぽい特定の文化があって、現在のやおい／BLにおいても、様々な他のポピュラーカルチャーの影響をいろいろな形で受けているだろうなという気がします。

それから作者の権威性の無化という点についてですが、私は、原作・原作者には権威性はすごく付与されているだろうと思います。

たとえば、この間私は中国で書かれた同人研究を読んでたんですけど、最初に、いかに原作に反してはいけないかということが延々と書かれているんです。あくまでも、原作をもとに解釈しあうのが共通理解なのです。また、原作者のことに關しては、こんなことを思い出します。金田淳子さんが、ユリイカという雑誌の対談記事で、原作者の方に自分のやおい妄想を直接語ったことがあったんです。それに対してネットでバッシングが起きました。「そんな妄想を作者にお見せするなんて」というわけです。このような権威性を原作者がもつ分、二次創作を作るもの同士は平等なポジションにいるという意識が強いのかもしれません。

こののち、フロアを交えて、さまざまな論点からの熱心な議論は続いたが、紙面の都合上割愛した。